

藤原不比等論

第1章 概論

天皇制というものを考えたとき、天皇の地位継承が断絶したときが歴史上一度だけある。武烈天皇のときだ。武烈天皇には子供がいなかったのもう一度擁立しなければならなくなつた。そこで担ぎ出されたのが継体天皇である。継体天皇も自分自身の力で天皇になつたのではない。擁立されたのである。

応神天皇、継体天皇の時代、国の権力は、天皇にはなく、天皇を支えた実力者がいたのである。もちろん、実力者は一人ではなく、多くの実力者がいた。天皇は、天皇の権威によってそれら実力者を従わせた。国の統治は、天皇中心に行われたが、律令制が確立されるまでは、天皇の権力は未熟であつた。人治国家の時代。

その後、大化の改新以降、天皇の実力がついてきて、律令国家となる。つまり、天皇主権法治国家の誕生したのである。天皇主権国家は、1232年の北条泰時の時代まで続く。

天皇主権法治国家の時代にも天皇を凌ぐ権力を発揮した権力者がいたが、蘇我入鹿、藤原道長などといえども、天皇と血縁関係を結び、天皇の権威を利用したからこそ、権力を発揮できたのである。

武士の時代になって初めて権力と権威が分離された。それを行ったのが北条泰時である。1232年のことである。物言わぬ天皇の誕生だ。

以上、天皇の権威というものに着目して時代を区分すると、応神天皇、継体天皇の時代、律令制度、御成敗式目の3段階に区分される。第3段階以降は、物言わぬ天皇、すなわち、完全に分離された権威にのみ生きる天皇による天皇制度は、途中多少の乱れはあるものの現在の天皇制に続いている。

応神天皇については「邪馬台国と古代史の最新」という論文で詳しく書いたし、継体天皇については「継体天皇にかかわる多くの謎について」という論文で詳しく書いた。また、御成敗式目は北条泰時が始めたものであるが、御成敗式目並びに北条泰時については「天皇の権威について」という論文で詳しく書いた。

「邪馬台国と古代史の最新」：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai.pdf>

「継体天皇にかかわる多くの謎について」：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keitai.pdf>

「天皇の権威について」：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tenkeni.pdf>

しかし、律令制度についてはまだ書いていない。

律令制導入の動きが本格化したのは、660年代に入ってからである。660年の百済滅亡と、663年の百済復興戦争（白村江の戦い）での敗北により、唐・新羅との対立関係が決定的に悪化し、倭朝廷は深刻な国際的危機に直面した。そこで朝廷は、まず国防力の増強を図ることとした。危機感を共有した支配階級は団結融和へと向かい、当時の天智天皇は豪族を再編成するとともに、官僚制を急速で整備するなど、挙国的な国制改革を精力的に進めていった。その結果、大王（天皇）へ権力が集中することになった。この時期に編纂されたとされる近江令は、国制改革を進めていく個別法令群の総称だったと考えられている。

天智天皇の死後、壬申の乱を経て政権を奪取した天武天皇は、軍事を政治の最優先項目に置き、専制的な政治を推進していった。主要な政治ポストには従来の豪族ではなく諸皇子をあてて、その下で働く官僚たちの登用・考課・選叙など官人統制に関する法令を整備していった。こうした流れは、体系的な律令法典の制定へと帰着することになり、681年に天武天皇は律令制定を命ずる詔を発出した。天武天皇の生前に律令は完成しなかったが、689年の持統天皇の時代に令が完成・施行された。これが飛鳥浄御原令である。しかし、この令は、律令制の本格施行ではなく先駆的に施行したものと考えられている。

現在判明している範囲では浄御原令の官制などの制度は、南北朝時代や隋の中国の制度や百済・新羅などの朝鮮半島の制度が織り交ぜられたものと考えられ、令以上に体系性を必要とする律、すなわち「飛鳥浄御原律」が制定されなかった理由の1つと考えられている。また、この時期までに隋律あるいは唐律が日本に伝来された可能性は低く、日本で律が編纂されるようになるには、唐との関係改善によって唐からの律法典が招来され、それを理解して日本の国情に合わせて改編できる人材の確保（唐留学生の帰国や唐人の来日）を待たねばならなかったと推定されている。

その後の701年に、大宝律令が制定・施行された。大宝律令は、日本史上最初の本格的律令法典であり、これにより日本の律令制が確立することとなった。大宝律令の施行は、当時としても非常に画期的かつ歴史的な一大事業と受け止められており、律令施行とほぼ同時に、日本という国号と最初の制度的元号（大宝）が正式に定められた。さらに、大宝律

令の制定後まもなく、空前規模の都城である平城京が、9年の歳月で建設された。これらにより、天皇主権法治国家というか天皇を中心とした中央集権国家が誕生したのである。

大宝律令編纂において中心的な役割を果たしたのが藤原不比等である。大宝律令の編纂には不比等だけでなく、田辺史に属する2名が関わっていたことが知られているが、これは不比等の推挙によって就任したものであり、田辺史の一族が法律知識によって不比等を助けたと考えられている。あくまで大宝律令編纂の主役は藤原不比等なのである。

日本の歴史上もっとも偉大な政治家は北条泰時だと私は思ってきたが、よくよく考えれば、藤原不比等もそれに勝るとも劣らない偉大な政治家である。北条泰時と藤原不比等によって日本の国体はできた。伊勢神宮と天照大神を原点とする神道とそれと深く結びついた象徴天皇の誕生である。

そのような北条泰時に勝るとも劣らない偉大な政治家・藤原不比等について、実は、私が納得できる論文がないのである。そこで、今回、私なりに「藤原不比等論」を書くことにしたのであるが、その前に、上述の論文「邪馬台国と古代史の最新」において、藤原不比等について触れている部分があるので、それをざっと振り返っておきたい。

「邪馬台国と古代史の最新」において、私は、藤原不比等について次のように述べている。すなわち、

『 記紀は、藤原不比等の深慮遠謀による素晴らしい創作物語である。』

『 不比等は、阿多隼人の存在を警戒しながらも、彼ら海人族の文化については、その吸収に重大な関心を持った。その一つが阿多隼人の有する呪力であり、もう一つが阿多隼人の有する海軍力である。第7章「藤原不比等の深慮遠謀」では、これらのことについて詳しく説明するとともに、不比等が神武東遷神話をどういう思いで創作したのかを説明する。海上の道が既に大和朝廷の支配下にあることを天下に示したかったのである。海人族ネットワークの分断作戦である。神武東遷神話によって、日本列島の水軍はすべて大和朝廷、実質的には藤原氏ということだが、中央権力の集中管理することとなった。藤原氏万全の体制が出来上がったのである。不比等ほど深慮遠望に長けた人は歴史上そうはいない。彼によって日本国の骨格ができたと言ってもけっして言いすぎではない。不比等の深慮遠謀を示す功績はそのほかに、天照大神に関する神話と伊勢神宮の創建したことや物部一族や秦一族の率いる職能集団の統括したことが挙げられよう。』

『 不比等の深謀遠慮は、邪馬台国の時代から、前ヤマトの時代へ、さらには、前ヤマトの時代から大和朝廷の時代へと、歴史的必然性を歩んできたが故に、その延長線上に立つ

て、深く考え、遠い将来を慮ったのではないかと、私は考える次第である。不比等は正しい歴史認識の上に立って、記紀を創り、アマテラスを創ったのではないか。』

『 不比等は「天皇は万世一系の存在」でなければならないというイデオロギーを持っていた。つまり、不比等は、「天皇は万世一系の存在」であって、蘇我氏のように天皇をないがしろにする輩はこれを滅ぼしても当然。蘇我氏を暗殺したわが父・藤原鎌足はまさに忠臣中の忠臣であった。藤原一族こそ廷臣の中で最高の忠臣である。藤原一族に齒向かうものは天皇をないがしろにする不届きものである。不比等はこう言いたいのだろう。』

『 第7章に述べたように、不比等は阿多隼人などの海人族に対して随分気を使っている。熊野は、太平洋側におけ海上交通の要かなめの地である。太平洋側の海人族のネットワークにとって、もつとも大事なところである。そこは古くから大和朝廷の支配下にある。そのことを不比等は言いたかったのであろう。熊野が古くから大和朝廷の支配下にあるのなら、太平洋側の海人族は、大和朝廷に反旗をひるがえすなどはもってのほか、と思うにちがいない。不比等はそう考えたに違いない。そういう不比等の思考にもとづいて、応神天皇東遷について、記紀では、御坊が登場する。この地は、縄文時代からの海人族の拠点であった。』

『 不比等は、豪族に対する警戒はあったけれど、文化面では、重要な面で南方系文化を重視した。すべての面で北方系の潜在的優位性を主張しているのではない。その点に少し触れておきたい。古事記の海彦山彦の物語についてであるが、これは海彦山彦の交換説話（これを以下において〈失われた釣り針〉型の説話という。）に浦島太郎の説話が入り込んだものである。すなわち、古事記の海彦山彦の物語は、二つの説話を張り合わせた不比等の創作説話であるということだ。もちろん、不比等が自分で考えついたということではなく、彼には稗田の阿禮や太の安萬侶などのブレインがいたので、彼らのアイディアであろう。不比等は、ブレインに対して阿多隼人がもともと天皇に隷属すべき民族であることを宣伝する神話を創れと命じたものと私は考えている。そういう意味で古事記における海彦山彦の物語は不比等の創作説話であると言って良い。』

『 不比等は阿多隼人並びに海人族のネットワークを恐れると同時に、阿多隼人を直轄の臣下にすることによって、全国の「アタ族」を統括したのだと思う。その主なものは熊野水軍と伊豆水軍である。白村江の戦いで、我が水軍の総司令官を勤めたのが伊豆水軍の流れを汲む庵原氏である。そういうことを不比等は十分知っていて、熊野水軍や伊豆水軍を大事にしたのである。それは、熊野神社や伊豆山神社を朝廷が大切にあつかつてきたのを見て解る。伊豆山神社のその伝統は、鎌倉幕府まで続く。』

『 日本にはさまざまな神がいる。不比等の頃の豪族は、それぞれにおのれの祖神を祀っていた。それらの神々を大事にしながらかつ、天皇を中心に全体の秩序立てを図る神、それが天照大神である。女性の太陽神、天照大神でなければならないのである。河合隼雄が言うように、男性の太陽神ではダメなのである。本音と建前、それをうまく使い分ける

のが日本人独特の知恵である。今ここでの脈絡から言えば、本音は各豪族の祖神。各豪族は本音で祖神に祈りを捧げながらも、建前としては、天皇の祖神、天照大神に祈りを捧げ、天皇に忠誠を誓うのである。これによって、朝廷の権威は揺るぎないものになる。不比等は、何と巧妙な社会構造を考え出したものであろうか。これが、河合隼雄の言う中空均衡構造である。』

『 さあ、そこで神武天皇神話における不比等の真意を推察してみよう。神武東征神話には、場所に関する二つの疑問がある。美々津の問題ならびに岡田宮と熊野の問題である。まず、美々津を出発地とした問題から述べる。神武東征神話の原点は笠沙である。なのに、神武東征の出発地を笠沙としないで、何故美々津としたのか？これには二つの理由がある。不比等は、笠沙について真実をひた隠しに隠して、海彦山彦の物語だけを語りたかったのである。美々津は、太平洋と瀬戸内海並びに東南アジアを結ぶ海上の道の結節点である。そこを出発地とすることによって、これら海上の道は、既に大和朝廷の支配下にあることを天下に示したかったのである。海人族ネットワークの分断作戦である。』

次に、何故、遠賀川の河口付近の岡田宮と熊野が神武東征神話に出てくるのか？ 瀬戸内海の主要な国が出てくるのはわかる。かつて、北九州の豪族が畿内に向かった時、瀬戸内海のクニグニとそれなりの緊張関係があったことは事実であろう。この緊張関係は、結構長く続いたものと見え、高地性集落が瀬戸内海地域に作られる。高地性集落は、その他の地域にも作られてはいるが、瀬戸内海地域に多いのは、北九州の豪族がおおむね瀬戸内海を通過して畿内に向かったからだと思われ、神武東征神話は、それを意識して作られている。したがって、神武東征神話の中に安芸や吉備が出てくるのは当然としても、岡田宮や熊野が出てくるのは不思議だ。古事記では、神武東征の途中、岡田宮に詣り天神地祇の八神（八所神）を奉斎し、この地に留まったとされている。 岡田宮の地は、天然の良港である洞海湾に面し、当時は、遠賀川ともほぼ小川や遊水池で繋がっていたと思われる。岡田宮のある洞海湾を含む遠賀川の河口付近は、北九州から瀬戸内海に向かう海上の道と遠賀川の結節点である。遠賀川は、香春という秦一族の本拠地であり、不比等の頭の中には、香春は大和朝廷の極めて重みのある地域として意識されていたのであろう。その重要な地域が、もともと大和朝廷の支配下にあったのだと、神武東征神話の中で、言いたかったのであろう。

熊野は、太平洋側におけ海上交通の要かなめの地である。太平洋側の海人族のネットワークにとって、もっとも大事なところである。そこは古くから大和朝廷の支配下にある。そのことを不比等は言いたかったのであろう。熊野が古くから大和朝廷の支配下にあるのなら、太平洋側の海人族は、大和朝廷に反旗をひるがえすなどはもってのほか、と思うにちがいない。不比等はそう考えたに違いない。

このようにして、日本列島の水軍はすべて大和朝廷、実質的には藤原氏ということだが、中央権力の集中管理することとなった。藤原氏万全の体制が出来上がったのである。不比等ほど深慮遠望に長けた人は歴史上そうはいない。彼によって日本国の骨格ができたと言ってもけっして言いすぎではない。』

『 鎌足によって鹿島神宮の乗っ取りはなり、東北における物部氏の勢力はそのまま藤原氏に引き継がれることとなった。藤原氏発展の基礎はここにでき上がったのである。藤原氏としては、如何にして東北経営に立ち向かうか？ それができるこそ不比等の深慮遠謀が具体的な形として完成するのである。事実、不比等の後、藤原内麻呂という大人物が誕生し、不比等の望みを達成する。それによって、かの藤原道長の絶頂に時代を迎えることができたのである。』

『 わが国の現在の神道は、藤原不比等が物部神道に道教の祓いの思想によって改良をくわえて大改革をしたものである。梅原猛が言うように、 記紀神話は、藤原不比等の「祓いの神道」によって作成された神話である。そして、この「祓いの神道」を国家計画化した古事記、日本書紀神話によって、正に祓いこそ、日本神道最高の、或いは唯一の神事であるかのように思われるようになったのである。』

『 藤原不比等の大改革によって「中臣の大祓の祝詞」が作られ、それに基づいた記紀神話が創造された。』

以上、藤原不比等の深慮遠謀が如何なるものかを説明したが、実は、大宝律令は「祓いの神道」の国家計画化が大前提になっている。「祓いの神道」の国家計画化がなければ、天皇主権法治国家というか天皇を中心とした中央集権国家はありえないのである。したがって、「祓いの神道」の理解なくして、藤原不比等を理解したことにはならない。そこで次の第2章は「祓いの神道」について書くこととする。